龍膽寺雄全集

第一卷

龍膽寺雄全集

第一巻

龍膽寺雄全集　第一巻
昭和五十九年一月十五日　発行

著　者　龍膽寺（りゅうたんじ）　雄（ゆう）
発行者　龍膽寺　雄全集刊行会
発売所　株式会社昭和書院
東京都千代田区神田神保町二丁目三六
〈鈴木ビル〉郵便番号一〇一
電話　〇三-二六四-八五九一
振替　東京七-一八二二七二
印刷・製本　㈱暁印書館
定　価　二、八〇〇円
©1984 Y. RYUTANJI
ISBN4-915122-46-8

目

次

創作小説（昭和初期編）
アパアトの女たちと僕と……5
放浪時代……39
創作小説（戦前・戦中・戦後編）
不死鳥……125
創作小説（最近編）
八柱神社の秘仏……187

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

エッセイ
芸術におけるレアリティ……241
随筆
歴史逸話……255
詩編……261
著者略歴・解説……278

創作小説　昭和初期編

アパアトの女たちと僕と

一

「おい。……」

そう言って、だしぬけに後から二つ三つ拳で肩を叩かれて、われに返った時、僕はとある仏具商の飾窓の、支那出来らしい紫壇の仏龕に見入りながら、ふと鼻の頭の冷たい触感に気をとられて、――いい気になってあちこちと、厚ぼったい硝子の面に顔を滑らして居た。振向くと友人の加治と植村とが、極端に輪郭の違う顔を二つ並べて、僕を見て莫迦莫迦しげに笑って居た。

「熱心に何を見ているんだい。」

蒲柳な白い顔に幾らか皮肉な微笑みを浮べて、植村は艶やかな洋竹を鬚路へおろした。夥しい雑踏が夜店の前にうごめいて居るので、彼等は絶間なくからだを人波に洗われていた。

「仏壇でも買おうと思ってね。」

僕は皺んだ手巾で鼻の頭を拭きながら自嘲的に笑って、飾窓のそばを離れた。――注意の焦点からいつとなく自分を失して、偏執狂の様に頭の片側へ空虚をこしらえて、ふと気付いて自分で莫迦莫迦しく笑ったりするのが、僕のこの頃の習慣だった。電車のクッションへ腰をかけて、前に立って居る識らない女の帯止なんぞを無心に指でいじって、ひどくはずかしい思いをしたりなんぞするのは再々なのだ。僕は友人たち二人のやや揶揄的な視線の中で、失した自分をまた拾い出して、変に瞼の辺を赤らめた。

夜店の前の雑踏を泳いでこごッたり離れたりしながら、暫く僕たちは話のいとぐちを見つける余裕もなく歩いた。

「どうした。さッぱり学校へ見えんじゃないか。」

加治がちょいと立停まって、鼻の先で囲った手の中を燐寸で明るくして、それから肩先のまるみを僕に押しつけた。

「やろうか?」

「持ってる。」

僕は彼のぶこつな手のひらの上の、バットの箱をちょいと見ただけで、不愛想に答えた。――徹底した唯物論的な解釈を生活に持って、拘束のない環境から侮蔑的な視線を自分の学生生活へ送って、社会主義者らしい口調をしばしば、そうして公然と漏らしながら、そのくせ驚くばかり実直に学生生活を送っているこの友人に、僕はいつも不快な、幾らか侮蔑的な気持を持って居た。それがなぜか今夜は、妙に僕の心理と相映ずるところのものを持って、柔らかく喰入ったのだった。

僕は自分の睫毛の裏に妙な涙の芽を感じた。

「どうだい。少し出てこないか。」

「うん。……」

「R・!」

だしぬけに人を掻分けて、植村が後から肩をつかんだので、僕は加治との会話を切って足をとめた。と、植村の口が僕の耳へすれすれに寄って来た。
「あすこに立ってる女、な。」
「……？」
「そら、あすこに鞄を見てるだろう？　眼鏡をかけて。……」
「うん。」
「あいつを僕識ってるよ。」
僕は無興味な眼を女から戻して。――ぼんやり彼を仰いだ。と、熱心に彼の視線をたどって、女を物色して居た加治が、むきだしな眼をそっちへ据えて、
「美人じゃないか。」
と、話を奪った。
「美人だ。」
「何者だい。」
「なあアに。僕ンところの近所の珈琲屋の娘さ。行きつけのね。」
「カフェか？」
「じゃアない、珈琲屋だよ。」
僕は玩具屋の前に立って、彼等の会話を無興味に耳へとめながら、硝子の小さな眼玉を光らせて居る大きな灰色のはりこの熊だの、耳を立ててチョコンと坐った縫いぐるみの狆などを眺めて居た。そうして、彼等と歩調を合わせると、
「十五円はたかいね。」
と、加治を振返った。
「何がよ。」
加治は莫迦にした様な顔つきを、僕から飾窓へそらした。
「熊がさ。」
僕は舌の根に変にねばねばする塊りを感じて、続けざま足もとへ唾を吐いた。
僕は今夜も感情的なある不快な記憶を残して家を出た。兄と学校の出席点検の通知について一寸した口争いをして、幾らか端的に感情をぶっつけて、そうして、――そうした決裂のまま家を飛出して来たのだ。さばけない、無口な、気鬱性で通って居る僕は、めったに人の中で、とりわけなじみの薄い家族たちの間などで、自分の感情をむき出したりする様なことはないのだったが、ふとしたきっかけから今夜はそこへメスを入れられて、――なまなましい血沫きをそこらへはねかして来たのだ。
僕の心理に常住に巣喰って居るある憂鬱な虚無が、おかしなことにはそんな時に限って、そのまま受売りの近代思想の鎧を着て、猛然と彼等――と言うよりは、もっと正しく言えば自分自身の弱みへ、逆襲して行く。それを受けとめられるのは、ただ一つ虚無の楯しかなかった。当然、僕はいかめしい鎧の重圧と一緒に、底知れない自分の虚無の中へ、落込んで行かなければならないのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

僕は墓場を訪ねる様な気持で、今夜も明るい街の雑踏へ索漠と足を入れたのだった。
「どうだい。……そこらで一杯冷たいものでもやろうじゃないか。」
白い洋竹を腋へかかえて植村が僕たちを振向いたのは、自動車の途切れを縫って車道を横切って、向う側の歩道の幾らか暗い甃路へ足を載せて、数歩してだった。僕は自分の気持を中断されて、ぼんやり友人の顔を仰いだ。
「今夜は僕金を持っていないぜ。」
「いいとも。」
植村は鷹揚にうなずいて、先に立った。
カフェM・の光の渦を張らした扉口へ足を入れかけて、ふと僕は店の向う側の化粧壁の一部を刳ったベビーショップの、つららのかけらの様な小さな飾窓を見やった。店の前には黒ッぽいフランス風の衣装をつけた軀絵が、幾らかまばらな人通りの真ん中に、小鳥の様に機敏に眼を動かして居た。
「何だい。」
「一寸。……」
僕は友人たちをそこへうッちゃったまま、三歩四歩甃路の灯影を切った。
おかッぱがくるりと足音に回って、仄白い小柄な顔と梟の様な黒い大きな眼とが、こッちへ向いた。
「U・ちゃん?」
「姉さんは?」
彼女ははっきりと頸を振った。そうして、顔じゅうをかぶせた髪の中から、華奢な指で大きな黒い瞳を掻出して、
「あたし一人よ。」
と、甘えた口のききかたをした。——シクラメンの匂が手にした花束からむッと僕の鼻を襲った。
「どうだい景気は。……」
彼女は答の代りにからだをねじって、腰のつがいをすりつけて、その一個所へ僕の手を引ッ張って行った。と、ポプリンの上衣の下に、——そこのポケットの辺に、ザクリと白銅の軋む重たい感触をさぐった。
「大分いいじゃないか!」
「いいね。」
そう言いかけて、彼女はいきなり僕の靴の頭を踵で踏みつけて、甃路の上を跳んで、タクシーの踏床からヒラリと跳びおりた若い二人づれの男の一人へ、飛びついて行った。——白い指が敏捷に男の灰ッぽい胸の辺で動いて、花弁のくるッたマーガレットが一輪、白くそこへとまった。
「帰りに寄って、ね!」
白い華奢な手のひらの上へ、男の手からキラリと光るものが落とされた時、彼女はくるりとこッちへ小柄な顔を向けて、扉口へ引ッ返そうとした僕に、そッけない声を投げた。

二

花電気の下では虫を透かした斑石の鏡を背に、友人たちが好奇深いはしばみの様な眼を二対並べて、僕を待って居た。

――僕が座につくと社会主義者は、砂糖壺から真ッ白い立方形を一つつまみ出して口へ入れながら、早速口を切った。

「へえ。あいつ君の女友だちかい。」

僕は彼女の花束から背負って来たシクラメンの匂を、どこかに感じながら、ポケットにいつも入っては居るが買ったことはない、ある年嵩の女友だちのところから『奪略』して来るスプレンデートの紙箱を出して、一本残って居た細い金口を銜えた。

「大分と了解のとどいた仲じゃないか。」

植村が品のある口振りを、冷淡に僕へ向けた。

――輌絵たち姉妹のベビーショップが新聞などで騒がれて、幾らか銀座の『通人』たちの間に識られかけたのはつい昨今のことだが、僕は彼女たちをずッと以前から、――彼女たちが単なる女売子として、新宿の盛場へ出て居た時分から識って居た。今言った年嵩の女友だち（S・と言う筆名で相当に識られた民謡詩人なのだ。）が、友人の木村と風変りな生活をして居る、淀橋のある小さなアパートメントに、彼女たちも一緒に居たので、そんな機会から近しく往き来をする様になったのだった。向島に姉が一人居て、あるもぐりの外科医の妾をして居ると言うのだったが、二三の事情から彼女たちは、たった一人のその肉身を避けて、姉妹でそこに自由生活して居たのだ。

アパートメントでは繁々と僕が彼女たちのところを、――と言っても、おおかたは二階の民謡詩人を訪ねるついでに、ちょいと寄りみちをすると言うぐらいに過ぎないのだが、――訪ねるので、僕が姉妹の保護者なんだろうなどと言う噂が、一時高まったりなどした。僕自身から言えば、保護者どころか反対に、彼女たちの乏しい財政から再々小遣いをねだったりして居る、甲斐性のない友人に過ぎなかったのだ！

彼女たちがベビーショップの計画を思いついたのは、S・さんが英字新聞で見たある写真入りの記事から暗示されたのだが、具体的な点では色々と僕が骨を折ったのだった。銀座のカフェM・の主人と識合いなのを手づるに、とうとうM・のコンクリートの化粧壁の一部へ、二尺角の窓を開けさせて、三百円たらずの資本まで主人に出させてしまった。もっともそれには、単純な僕の奔走以外に、彼女たちと彼との間に、ある種の妥協が成立したせいもあるのだが。

美貌な女給たちを集めることの上手な、好色家の主人は、どうやら自分で打った網に自分で引ッかかったと言う風だった。いつしか娘たちは大びらで、彼に着物をねだったりする様になったのだ。

彼女たちは、そこへジャスモンドの香水や、フランスやドイツのさまざまな媚薬や、雑多な催しものの会員券などを色々と並べて、M・を根城に、かたわら花と『壺』とを売って居たのだ。
「妹の方が美人だね。」
桜んぼうの沈んだカクテルのグラスを配られると、いち早くそれへ唇をくつけた植村が言った。
「そうかね。」
と、加治は反駁的な口振りで、
「俺はむしろ姉の方へ好感を持つな。」
「処女じゃないだろうけれどもね、どッちも。……」
上品な植村が軽くこだわった眼を僕につけて、珍しく露骨な口調を弄した。
「女売子が十六七にもなって、処女だったら奇蹟だ！」
と、社会主義者が駁した。
「女売子にゃア限らねえ。あらゆる近代の女性がだ。」
「しかし、」
と、植村は幾らか冗談らしく、
「少なくも僕の妹は処女のつもりだけれどね。」
「あの面じゃアね！」
と、加治が無遠慮にやッつけた。
「……せめて僕に似りゃアね！」
「へ！　そこまで徹底すりゃア、むしろ同情するがね。」
と加治は嘯いて、
「おい、一本くんないか。」
と、僕の方へ手を出した。
「お生憎さま。空だ。……」
僕が華奢なスプレンデートの紙箱を指で弾いて、卓子の面に滑らせると、彼はそれでもそれを手にして、一応中味を調べながら、まるでそれとは無頓着な口振りで、
「R・に一つ紹介して貰ったらどうだい。」
と、植村の顔を見た。
「……ついでに、俺にもッてなわけなんじゃないのか。」
「冗談じゃねえこン畜生！……察しのいいこと言いアがる。」
と言って、うわッはッはッは！　と、加治は天井へ笑い上げた。
外へ出ると、――思いがけない雨だった。こまかい霧雨が幅の広いベールを空からたらして、街の灯を包んで、甃路を濡らして居た。右へ左へと行き交う自動車のヘッドライトがそれを映して、恐ろしい長い光芒を顫わして居た。
「誰かしら傘を持ってアがるから癪だ！」
雨の中へ立つと、だしぬけに加治が高声を立てた。
「君の筆法で行けば、……小市民的利己主義だと来るんだろう。」
「ふん。」
社会主義者は歯牙にもかけないと言う風で、くるりと視線

を転じて、
「お嬢さんたち雨で遁げたな。」
ベビーショップは四角い窓枠へ黒く鎧扉をおろして、そこらには鞆絵の姿も姉の奈々子の姿も見えなかった。
「さて、……一寸俺は芝浦へ用事があるから、失敬するぜ。」
尾張町の角まで引ッ返すと、突如、加治は言い出した。そうして挨拶もなくそのまま縄跳びでもする様に濡れた線路をまたいで、向う側の歩道の雑踏の中へ、姿を消してしまった。
「どうした。元気がないじゃないか。」
霧雨の中を肩を並べて歩きながら、ふと植村は僕を顧みた。彼の厚い近眼鏡が沫きに溺れて、キラキラと灯を融かして居るのが僕の眼についた。——僕はだまってただ憂鬱に微笑んだだけだった。
新橋駅で手のひらの様にすれ違った向きの違う電車へ、別れ別れに乗ったのは、それから数分してだった。

三

「どうしたの？」
僕をアパートの蔦のからんだ粗末なポーチへ迎えると、鞆絵は僕のからだへ手を触れてみて、いきなり叫んだ。僕は彼女の色の褪せた古びた白ッぽいネルの寝間着から、ふと牛乳の匂をかいだ。
「こんな雨の中を今時分。……」
僕は帽子を床へ振って雫を切って、だまって先に立って扉を開けた。
——部屋にはもう夏のよそおいがしてあった。八畳と二畳と続きの古びた日本間で、その八畳の半分へ彼女たちは床敷を拡げて、——籐の低い卓子だの腕椅子などを据えて、部屋を二色に使い分けて居た。残らずで十ぐらいしか部屋のない小さなこのアパートメントは、つい路地のとッつきのF・と言う雑貨商が経営して居るので、F・荘とよばれて居たが、淀橋のアパートで一般には通って居た。別にそう言う規定があったわけでもないのだが、なぜか若い女たちの世帯が多いので、煤けた低い赤煉瓦の垣をめぐらして、蔦に覆われたこの漆喰の建物は、どこかに妙なある艶かしさを蔵して居た。
錆びた細い鉄棒のアーチに卵の殻の様に外燈のこわれた表門をくぐると、正面にポーチが三つ並んでむらに蔦をかぶって居た。その右のはしのが鞆絵たちやS・さんの部屋ので、ホールの左側に鞆絵たちの部屋の扉があり、ペンキ塗りの階段を真ッすぐに昇ると、二階のS・さんの洋間へ出る様になって居た。
各部屋部屋は完全に厚い壁で仕切られて居て、窓の向きも大体考慮されて居た。ただ、天井の高い狭い廊下が建物の北側を貫いて、どの部屋もそこへ戸口を持って居たので、そこを開け払って置くと、建物全体に包蔵された共通な雰囲気、

――もの音や、匂や、何かしら人の多く住むところにつきまとう落ちかないものの気配などが、侵入して来た。

ガスや水道などの配置された共同の台所と、――風呂と便所とが、その廊下の中ほどからT字形に北へのびた別の廊下に接してあるので、そこでだけはこの建物に住む全家族たちが、朝夕顔を合わせた。

鞆絵たちは蔦のトンネルの下の狭い二畳へ、一杯に布団を拡げて、そこを寝室に使って居た。僕はよく彼女たちの留守にそのちんまりした寝間へもぐり込んでは、白粉くさい友禅の掻巻にくるまって、ずうずうしく午睡を貪ったりなどしたものだった。時には女たちの間へ狭まって、雑魚寝をしたりする様なこともあった。

「莫迦ね。雫がたれるわよ。」

彼女は僕から、不愉快に肌へねばりつく濡れたセルを剝がすと、その代りに幾らか汗くさい、彼女のメリンスの普段着を壁からとって来て、妙に姉さんぶった手つきで肩から羽織らせた。

「病気になったらどうするの?」

「うちが病院だからね。」

そう気鬱にふざけて、それから僕は赤い絞りのしごきを締めた。

「姉さんは今夜は帰らないのかい?」

彼女は邪慳に椅子を動かして来て、だまっておかッぱをあげて、――頸を振った。

「階上の人たちは?」

「みんな居る。」

彼女は膝頭を僕とぶッつけて、椅子へ深くかけて、気もなげに答えた。そうして、肘突へ肘を載せたまま、滑らかに手首を動かして、卓子の上の錫のシガーセットを僕の方へ動かして、――恐ろしいすました顔をヒョイとあげた。

子供子供しい小柄な顔には白粉がむらに剝げて、血色の冴えない窶れめな頬や、睫毛をかこんだ荒んだ不健康なくまなどが現れて居た。幾らかおでこな額から、子供らしく反れたほッすらした鼻すじの辺の緻密な皮膚が、おかッぱの陰で牙の様に冷たく光った。――

「お莫。」

「へえ。……」

僕は憂鬱な眼の表へ、おどけた表情をつくって見せた。そうして、彼女のまねをして肘突の上でこの様に手首を回して、錫の箱からエアシップを一本つまんだ。と、――敏捷に彼女の手の中で燐寸が小さな炎をあげて、華奢な彼女の指を赤く透かせた。

「M・で一緒だったあの男の人たち、お友だち?」

「うん。」

僕は蠟の吸口を歯で潰した――彼女は血の色を透かせて薄く乾いた唇を、子供の様にまるく尖らかして、じッと光る眼

を僕の口元へつけた。妙に涙ぐんだ様に光る眼を。
「君は女優になるといいよ、映画の女優にね。……」
「なアぜ？」
「君のがらがそうだからさ。」
「なかなか美人だから？」
彼女はからだを椅子の背へぶッつけて、仰に頭を凭らして、
――おかッぱの中へ指を突ッ込んで、ムシャムシャと髪を掻いた。
「あたしこないだ姉さんに叱られちゃった。……」
「なぜ？」
「吉原へ行ってお女郎になろうかしらッて言ったのよ。」
「お女郎だって結構じゃないか！」
「そうよ。」
と彼女は脚を組んで、
「……姉さんなんぞとてもだめよ、旧くて。」
そう無興味につぶやいて、不意に僕の前へ窮屈に立った。
「一寸待ってね。……あたし、ココアをいれたげるから。パンか何ぞ喰べる？　喰べかけでよけりゃア鮭の罐詰もあるわよ。」
「そう。……何か喰べさしてくれるかい？　本当言えば僕今日は夕御飯もまだなんだ。」
「じゃM・で喰べたらよかったじゃないの？」
「お金がなくちゃ喰べられないじゃないか！」
「哀れなやつね。」
僕は一寸不快な、――と言うほどでもない、何かある憂鬱な眼で彼女を仰いだ。と、だしぬけに彼女はからだをこごめて、華奢な手を僕の首へからめて、モシャモシャと髪を僕の顔へかぶせた。
「U・ちゃん慍った？」
僕は冷たい手で、幾らか邪慳に彼女の髪を掻きのけた。――彼女たちから時折小遣いを恵んで貰っては、それでカフェ回りなどをして居る僕は、なぜかこんな場合にこうした意識をもって、冷たく自分に反抗しなければならない、憂鬱なこだわりを持って居たのだ。
「うるさいな、放しておくれ。……」
「厭、厭、厭、慍ッてるんだから。」
彼女は鼻を押しつけて頸を振った。
「慍ってなんぞ居やアしないよ。」
「慍ってるわよ慍ってるわよ！」
彼女は僕の顔の上でまた頸を振った。そうして、僕の指にどこかからだを探られて、――突然華やかな笑い声を立ててそこから跳び退いた。

四

数分後、僕たちは人気のないひっそりした台所に、ガス焜

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.